

# 小田原史談

第20号

談会館  
小田原市幸一丁目  
發行所 小田原市文化  
郷土

## 真説曾我兄弟 (六)

中野敬次郎

### 十一、数多き曾我兄弟の墓

史上有名な或る一人の人物の墓が何個もあって、その真疑の裁定に歴史家が迷わされることは随分あることであるが、曾我兄弟の場合もその甚だしい一例で、兄弟の墓と伝え、埋葬地だと主張する所が各地に分布している。現在墓石の存在するものだけを挙げて、次の通りの多きに達している。

- 一、小田原市下曾我谷津、城前寺
  - 二、神奈川県箱根町芦ノ湯温泉、上双子山麓
  - 三、神奈川県箱根町湯本温泉台ノ茶屋、正眼寺
  - 四、神奈川県二宮町中谷、知足寺
  - 五、静岡県富士宮市鷹岡字久沢、福泉寺
  - 六、千葉県八日市場市匠差字山桑、鬼王家宅地内
  - 七、市場県八日市場市匠差字山桑、医光院
  - 八、和歌山県高野山、金剛峯寺
  - 九、大阪府豊能郡庄内町西能勢字枯原
- この外に私の聞知しないものが、まだ有るかも知れない。これらの墓の中で、最も有名で従来世に知られてきたものは、箱根芦ノ湯温泉の双子山麓にあるもので、東海道第一号国道に添っているものであるから、箱根遊覧客が必ずバスガイド嬢から一応の説明を受けるので、今でも真実曾我兄弟の墓と思う人が多いようだが、全然兄弟には関係ない墓石である。
- 高さ二メートル十二センチある雄大な五輪塔三基（二基はやや小さい）が一号国道

に向って並んでいるので車中からでもよく人目につく。二基肩をそろえて建っているのが、十郎祐成・五郎時致のもので、少し離れて建っているのが、十郎の愛妾虎御前の墓だと伝えられて来た。石造美術として鎌倉時代の優秀な作品ではあるが、虎御前の墓石と言われるもの台石に「右志者為地藏講結縁衆等平等利益也。永仁三年十二月日」と刻されているように、ある地藏講を結集している講中諸人の平等の利益のためを祈って永仁三年に造立したものである。すでに今から百五十年前にできた「新編相模風土記」に「曾我兄弟ノ碑ト言フハ何ノ廻アルニヤ、寛東ナン」と述べ、虎御前のものに対して「台石ニ永仁ノ年号アリ、全く当時ノ供養塔ナリ、虎ガ墳ト云ハ解スベカラズ」と記しているが、兄弟及び虎の墓だと喧伝されたのは相当古い頃からであるらしく、江戸時代の記録の大半は真正のものとして報告されていて、今もその情性で説明が行われているのは残念である。しかし箱根の今一つの場所、湯本台ノ茶屋の正眼寺に曾我の墓があるのは由緒のあることである。この寺は箱根旧街道に面して、もと真言宗で正源寺と言われた古寺であったが、今は臨濟宗で有名な湯本早雲寺の末寺である。この寺の境内に一基五輪状の墓碑があって、「祐成、高峯院峯岩良雪居士、建久四年五月廿八日。時致。鷹嶽院士山良富禪定門、同年五月廿九日」と刻されている。この寺は兄弟が箱根往來の途次に屢々立寄って放光堂内の地藏尊に仇討成就の祈願を凝らしたところであったので、兄弟の没後に、母と虎御前とが曾我堂を建てて、兄弟の等身大の立像を作り堂内に安置して冥福を祈ったという由緒を伝えていて、この墓碑も、母と虎御前とが、兄弟追福のために建立したものであると寺伝しているが、事実はずっと後世のもので寺僧が、由緒に従ってか、自ら由緒を作ったか、後世に建立したものであると思われる。

次に二宮町の知足寺のものであるが、同寺については、兄弟の異父の姉である二宮太郎夫人の菩提寺であることは既に述べたところであるが、この姉は後に剃髪して花月尼と称したが兄弟の没後、その齒髪を得てこの境内に葬り墓を築いて二弟の冥福を祈ったというが、今は当時の墓石はなく、現在のものは、元祿年間に知足寺第七世の僧自誓檀秀が建立したもので、十郎のは「前太守曾我十郎祐成、峰巖良雪大居士」五郎のは「前太守曾我五郎時宗、土山良富大居士」と刻してあって、所謂後世の供養塔たることは言うまでもない。

さて、静岡県富士郡久沢の福泉寺の曾我兄弟の墓は、寺では兄弟の遺体を葬ったところであると主張し墓地も堂々として立派である。この寺の位置は、身延鉄道の入山頼駅を下車して数町のところにあって、寺には兄弟の木造もあるが墓は境内にある。石垣を高く積んで六級の石段を上ると、周囲を石柵をめぐらし、正面に鉄扉をつけ、その中に兄弟の五輪塔の大きな墓石が並んでいる。石柱には「曾我廻家五郎寄附」「曾我廻家十郎寄附」と刻してあって、墓の石垣や柵などは近頃の改修であるが、墓石は古い。一体、このようなところに兄弟の墓のある理由を寺伝に尋ねると、寺外に幅

三メートル位の小溪流があつて富士山麓から水源を発するものであるが、富士巻符の後に、兄弟の遺体が流れ来て、ここに留つたので、寺に収容してねんごろに葬つたと言ふことである。

後に詳述する筈であるが、寺伝は如何にもあれ兄弟の遺体が捨てられて、このような処へ流れついたなどは考えられないことである。しかし、このような伝説が正面切つて伝えられ、立派な墓場まで作られてあるからには、何かそれ相応の兄弟との因縁があるためである。「甲越信戦録」という書物の中に、武田信玄の頃に、臨濟宗の僧侶が行脚して富士の麓野を通つていて日が暮れたので、樹下の石上で一夜を過そうと思ひ座禅を組んでいて、一人の壮士が現われて、その草庵に導いてくれたが、その壮士は曾我十郎の亡霊であつたので、その僧侶は、曾我兄弟の霊が今だに成仏せずして、修羅の苦しみに責められているのを憐んで、近くの善福寺という寺に二人の墓を建てて追善を行つたと言ふことが記されてある。この「甲越信戦録」に記されてある善福寺というのが、福泉寺のことではなからうか。そして兄弟の墓は、本来はこの伝説から起きて作られたものであつたが、次第に寺の喧伝上現実化した話になつて、流れ付いた兄弟の遺体を葬つた場所と言ふようになったのではなからうかと言ふ人もある。

意外な処に曾我兄弟の墓があると言へば、それは千葉県の太平洋岸に近い匝瑳という意外なところにあるが、これが理由を聞いて見ると意外ではないのである。

曾我兄弟の郎党に鬼王丸と丹三郎(また団三郎とも言う)というのがあるが、鬼王丸は曾我兄弟の祖父伊東入道祐親の家臣松原家軍の子であり、丹三郎はこれも祐親の家臣富田親邦の子であつたので、本来は兄弟ではないが、曾我物語の流布本・謡曲・歌舞伎などでは多くが兄弟になつてゐるので、一般の人々もそう心得てゐるようだ。そこで一般説に従つて私も鬼王・丹三郎兄弟として取扱つておくが、さて、この鬼王兄弟の子孫という家が、現在千葉県八日市場市の旧匝瑳村の山桑といふところにあつて、家の姓を鬼王家と言つており、曾我兄弟に郎党として仕えたのは、兄は鬼王新左衛門、弟は鬼王団三郎といふ名であつたと伝える。この家の屋後の林中に一段高く三坪ばかりの土盛があつて、その上に曾我兄弟の二墓の墓石だといふのが建つてゐる。

新左衛門・団三郎の兄弟は、主人の十郎・五郎の没後、曾我の里の母御前に仕えたが、晩年故郷に帰つて主人兄弟の墓を建て、その側に草庵を結んで懇ろに菩提を弔つたと伝えていて、その時建てた墓であると言ふが墓石は明かに近世のもの故、今のものは後世に鬼王家の人によつて再建されたものと思われ。

この山桑の地に医光院という寺院があり、鬼王家の菩提寺であるが、曾我十郎の墓、曾我五郎の墓、虎御前の墓、化粧坂の少将(五郎の愛妾といふ)の墓、鬼王新左衛門の墓、鬼王団三郎の墓が、左右にずらりと並んでゐる。勿論、鬼王一家のものが祖先の墓と共に建てたものである。

西で最も遠いところにある兄弟の墓は高野山と大阪府下の柏原のものである。しかし、この二つながら鬼王兄弟の建設したものだと思はれておつて、高野山のものには鬼王兄弟が、主人十郎・五郎の遺髪と遺骨の一部を提えて山に登り、墓を築いて供養追福したものだといふことで、伝説の上での鬼王兄弟は主人曾我十郎・五郎の喧伝に大活躍している。ただ、大阪府下柏原の墓は、何故鬼王兄弟が、このような処に建立したのであるか、私はいまだこの墓を見ていないので、未調査のために解らないが、やはり何か因縁があるであろう。

いづれにしても、鬼王兄弟と虎御前とは、曾我兄弟の後生を弔う行為の人物に使うには、最も好適であるので、曾我遺跡の由来には、この三人が利用されてゐることが多い。

このようにして、曾我兄弟の墓といふものは数多いが、上述のものは、何れも後世の供養塔であるか、全然関係もないものであつて、眞の墓は他になければならないが、それは言うまでもなく、小田原市下曾我谷津の城前寺である。兄弟の首級ならびに遺骸が曾我の里に葬られたことについては後に別項に詳述するが、ところが、その眞の墓地に残念ながら当時の墓石がないのである。

最初の墓石がいつ頃失われたものか明かでないが「新編相模風土記」にも、城前寺や曾我地方における兄弟の關係遺物、遺跡については詳しく記しているに拘らず、墓石については一言も触れていないし、かつて存在したことも述べておらぬところからすると、恐らく古く失われたものであらうと思われ。

「曾我史跡備考」によると永祿二年四月の北条氏對曾我氏の兵火の際に曾我兄弟の墓も破壊されてしまつたのであると記しているが、前にも述べたように永祿二年の兵戦のあつたことについては眞疑が問題であるので、このとき墓地が毀されたといふ点も果して事実であるか。曾我祐信墓と伝える宝篋印塔が曾我山の中腹に現存することから考えると、兄弟の墓石ももとの近くにあつて、農地開墾の間に失われたものであつたのだらうか。

さて、現在の曾我兄弟の墓は城前寺の堂後の境内に存する。昭和三年中村歌右衛門を会長とする俳協協会が、ここにある曾我祐信、満江御前、十郎祐成、五郎時政の墓地が荒れているので、これを改修しようといふ計画して資金を集め、昭和五年八月改修を完了したものであつて、墳上に父子四人の五輪塔が並んでゐる。そしてその前側に文學博士坪内逍遙筆になる大きな曾我遺蹟碑が建立されてゐて、その改修の由来を述べてゐるが、その裏面に記された俳協協会発起人には、市川歌右衛門・尾上梅幸・市川中車・市村羽左衛門・松本幸四郎・沢村宗十郎・市川左團次・尾上菊五郎・中村吉右衛門・阪東三津五郎・守田勘弥・阪東彦三郎・大谷竹次郎・川村徳太郎・山川金太郎の当時の梨園の錚々たる大家の名前が連ねられてゐる。

## 十二、曾我の里の傘焼祭

曾我兄弟の菩提寺で、兄弟の墓や遺物のある下曾我の城前寺では、毎年五月二十八日の所謂仇討記念日には、法会が行われているが、その時に行われる傘焼法要を、近隣の人々が曾我の傘焼祭と言って、多数の参会者や見物人が集るので、珍らしい行事である。

この傘焼祭の行事は九州にも同じ名称で行われるところがあるようだが、曾我の里の場合、いつ頃から起きたものか、記録がないので明かでないが、江戸時代の末頃からは毎年欠かさず行われておいて、明治・大正・昭和へと続けられてきたが、国内情勢の性迫した昭和十二年の日支事変の頃から一時中止になっておいたが、昭和三十三年に約二十年振りに復興せられて、小田原市の一つの名物行事となった。

各家庭で使い古した古い傘(唐傘)を、部落近隣から前もって寺に奉納させて集め、五月二十八日の当日の午後境内で盛んに燃きあげるのであるが、それに先立って、午前中から寺内で近隣同宗(浄土宗)の諸僧を招いて供養法会が厳粛に行われるが、まづ、本堂の須弥壇の上に、同寺所伝の十郎・五郎・虎御前の三妹の木像安置して、堂を埋める参詣者をひかえて諸僧の説経が行われ、その式が終ると、十郎と五郎に扮した十才ぐらいの二人の少年に、美麗な仇討の時と同じ格好の服装をつけさせ、松明を持たせ、諸僧に導かれて堂を下りると、行列を組んで境内に出て、兄弟の墓前の広場に進み、山と積みあげられてある古傘に、二少年が左右から点火すると、火焰は忽ち高く立ち上り、その周囲を僧侶達が、南無阿弥陀仏と唱えながら輪を作って廻ると、参集者も皆合掌して、これに和して斉唱を続けるのである。

これは、曾我兄弟が討入りをした時は豪雨の中で、一寸先も見分けがたい暗夜であったので、故郷の人々が天もこがせと火を焚いて、その火明りが富士の麓野まで達して、兄弟が無事本懐を達するように祈ったという故事によるものだとしたことであり、また、兄弟が仇討のとき松明を持って、その火明りをたよりにして、暗夜を適中に突進して見事本懐を達した故事に起源するものとも言われていて、いづれにしても、この伝説も面白いが、行事も誠に珍らしい。

このようにして、兄弟の霊を供養すると共に、古傘は部落の家々から奉納したものなので、これを焚きあげるとは、各家庭各人のカサ(病)を焼き払うの意味にも通じ、春納者の家内安全、無病息災をも祈願するのだということ、部落内や近郷の人々が「お焚上げ傘焼供養」と言って、参詣や見物に集ってくるのである。

この日、夜になると傘焼祭とは別に寺前の庭で、大松明の焚き上げを挙行するので、これも、兄弟が富士の麓野の巻符での夜討の際に、松明をわかって暗闇の中を、工藤祐経の陣屋に忍び込んだ事故によって行うものであると言われているが、赤い焔が天をこがして立ちのぼり、曾我の里を照らすので、この日里人は終日曾我祭に酔うのであ

る。

昭和三十七年五月二十八日は復興五年目の傘焼祭で、私は講談家の宝井馬琴師と相携えて式に参列したが、たまたま、この日はおそくなくても俳優の市川左團次氏が参詣に来られるということであった。

馬琴、左團次両氏が傘焼祭に参加されるということは珍しいことであるが、これは決して偶然のことではない。今の馬琴氏は四代目馬琴だそうだが、曾我物語の講談は代々御家芸の十八番であるが、四十才までは曾我物語は語ってはいけないうい家憲のような伝えがあるとのことで、その禁止の年令も越えたので今後は大いに新しい趣好も入れて曾我兄弟を語りたいという希望で、「馬琴歴史の会」の会員五十数名をつれて小田原・箱根方面の曾我兄弟の遺跡を研究しようということでも私も相談があって同行したのである。

曾我兄弟の仇討は日本三大仇討の筆頭に数えられ歌舞伎にはおなじみのもので、曾我劇は歌舞伎の春芝居の吉例として興行されるもので、昔は曾我物を上演する時には、必ず俳優達が城前寺に来て霊前供養をしてから初日をあげたもので、劇場の楽屋にも兄弟の霊を祀るところのあるものがあり、折々には、城前寺の兄弟の木像を借りうけて、江戸の新富座などの劇場に安置して曾我祭を行った程であったが、明治の中頃から次第にそのようなことも行われなくなったので、歌舞伎人もいつしか曾我の遺跡を知らぬようになった。たまたま、昭和三年、時の東京俳優協会々長の中村歌右衛門が、葉山の宿で按摩にかかっているときに、その按摩が物知りで、小田原の下曾我の城前寺という寺に兄弟の墓所があり、この地が遺跡として最も由緒の確実なところだが、それが甚だ荒廢していると話すので、これを聞いた歌右衛門が、それは捨ておけないことだ、是非とも供養塔を建てて永久保存の設備をしなければとて、このことを協会常務理事の阪東彦三郎と協議の結果、「曾我遺跡保存会」を設立して、俳優協会その他劇会に呼びかけて賛助を仰ぐことになった。

そして、その最初の歌舞伎として、同年八月二日・三日・四日に至る三日間、市川右右衛門以下五十余名の歌舞伎俳優一行が下曾我に繰りこんで、駅前当時の曲所引所で、曾我兄弟追善歌舞伎を興行したのであった。そして、「夜討曾我」三幕、「義経千本桜堀川上使の段」一幕と、「曾我祭」とを上演したが、この片田舎には前古未曽有の盛時であった。そして、予定の如く昭和五年墓地を立派に改修し、墓石を建造立し、「曾我兄弟遺跡碑」をも建てたことは、前回すでに詳述したところである。大谷竹次郎氏なども、この墓地改修の発起人として一役買っていることなども郷土資料として面白いと思う。

この墓地改修事業の行われた当時発掘された曾我兄弟の遺骨と言われるものが、久しく本堂に安置されてあったものを、今回傘焼祭の際に墓地に埋葬することになったので、今は亡き当時の歌右衛門の功績に対しても、兄弟の霊を弔って供したいというこ

十三、曾我兄弟の遺体の埋葬地について

とで、市川左團次丈の来會となった次第であつたらしい。

昭和三十七年五月二十八日に催された曾我城前寺の傘焼祭には、見逃し難い一つの行事が同時に行われたのである。それは曾我兄弟の遺骨供養と、その埋葬式であつた。今から七十六年も昔の曾我兄弟の遺骨が今頃埋葬式を行うと言ふのは、ちょっと奇異に感ぜられる話であるが、実は、昭和三年墓地改修の頃に、城前寺裏手にある俗にお花畑と称するところから、一個の壺に入れられた遺骨が発掘せられて、それが曾我兄弟の遺骨であると推定せられ、当時寺僧の意志で鑑定が行われたが、その後本堂に安置されて三十数年を経て、今回これを同寺にある曾我兄弟の墓の五輪塔の下に埋葬することに成つたので、遺骨供養と埋葬式を挙行した。そして、招かれて私もその式に参列した。

ところが、その遺骨は果して曾我兄弟のものなのであろうか。何によつて、それを実証することができるのであるかという問題が存在するのである。この遺骨について語らうとするには、まづ第一に富士の麓野で仇討の本懐を遂げた後、自らも生命を亡った兄弟が、その遺体をどこに埋葬せられたのであるかということに明かにしなければならぬ。

前述のように兄弟の墓と伝えるものは全国各地にあつて、単に供養塔だと言つているものもあるが、遺体の埋葬地であると強く主張しているところもあるので、この問題の取扱いはなかなかむずかしいのである。

「曾我物語」の記事によると、兄弟が富士山西麓の野の露と消えたとき、尾河三郎という者が將軍頼朝の命を受けて、兩人の首を足高に入れて最後の地井出（身延鉄道井出駅の近く）を出発して、曾我の里の父母のところに送りどけていた。

また、死体の方は、兄弟の従弟に当る人に宇佐美禪師という僧があつて、駿河国有度郡の布袋山自在院平次寺の任職であつたが、事変を聞いて急ぎ富士野に馳せ行って遺体を茶毘に附し、その骨を首に掛けて六月三日曾我の里に到着し、兄弟が幼少の頃から常に遊んだ花園に埋葬したと述べておつて、これによると、兄弟の遺骸は首級も胴体もともに曾我の里に葬られたのである。

曾我の里は、兄弟が五才と三才の幼少から、最後の年まで十八年間住んだ事実上の故郷であり、養父も実母もお生存して住居している土地で、兄弟には最もゆかりの深い場所なのだから、この地に埋葬されたと考えることが最も妥当なのである。

「曾我物語」は後世の室町時代に書かれた稗史小説であると言つて、その記録を丸呑みには信用し難いということでは「吾妻鏡」の記事を見よう。同書では、兄弟の遺骸の処置については一言も触れたところがないが、建久四年六月七日の条を見ると、この日富士の巻符を終つて、源頼朝が諸將兵を率いて駿河の国から鎌倉に歸つたが、

兄弟の養父曾我太郎祐信が御供に加わつていたので、路次の途中から休暇を与え、且つ曾我庄の年貢を免除して、兄弟の死後を厚く弔うように言つて、曾我の里に歸郷させていたのである。これは言うまでもなく、將軍家が兄弟の冥福を養父に祈らせたもので、曾我庄の年貢の赦免は明かに、そこに兄弟が葬られてあるからのことであつて、「曾我物語」の記事を裏書しているものと思われる。そこで、昭和三年に発掘の遺骨が曾我の里に葬られた事実は疑うべくもないであらう。そこで、昭和三年に発掘の遺骨が真実曾我兄弟のものであるかどうかというところ、これは確証があるわけがなく、あくまでも推定にとどまるものである。発掘された遺骨は高さ二十二センチ程の素焼の土製の壺にはいっている。発掘当時黒板勝美博士が寺の招きに応じて来られ、つゞぎに調査されたと言ふのであるが、発見のときの現状は壺の上に平石が置かれてあり、その上に阿弥陀仏が地蔵仏に擬して刻された幅十二センチほどの丸い平板の石面が立てて置かれてあつたこと、私もその石面を今度見たが、壺と共に鎌倉時代に溯り得るものと思つた。発見の場所は寺の後方の畑地で現今俗にお花畑と称せられてお花畑と称するところであるが、「曾我物語」に宇佐美禪師が兄弟の遺体を茶毘にして、その遺骨を持ち歸り、兄弟が幼少の頃から遊んだ花園に埋葬したとあるが、その花園のあつたところを、後世お花畑と称するのだからと里人は言つている。

また壺にしても石面にしても非常に古いもので鎌倉時代に十分溯り得られるものであるということ、壺に入つていた骨も茶毘骨であつたがその中に臼齒と犬齒があつてその磨滅状態の少ないところから、黒板博士も青年の遺骨に違いないと証言されたといふ。

これらの諸点から推定して、この遺骨は兄弟のものに違いないということであつた。思うに、この発見地点は、曾我氏居館の廢趾と考えられる場所であつて、その地から発見されたもので、以上のような条件をそなえているとすれば、兄弟の遺骨と推定することも、可能であらう。然し、この地における曾我氏の一族の永い歴史から考えると、推定はあくまでも推定であつて、確実に十郎と五郎の遺骨であると答えられるかということになると、まだ疑問も残るようである。何れにしても三十余年の永い間、本堂の一隅に置かれていた遺骨が、今回いとも壮嚴な埋葬式によつて墳丘の奥深く納められたので、靈も永劫安住の地を得たことに違いない。(つづく)

井細田の歴史

城北史談会 星野喜久雄

昭和三十七年秋国鉄寮が、れるに当り基礎がためた。ましたので何か出ないかな鉄筋コンクリートで建築さめ、地下四米位掘り起されと好奇心も手伝い、井細田

富士フィルム寮の裏側の道路から見ましたが別に土器も出ず累土の下に赤土の層が散見されただけでした。相模国井細田村風土記には城が二つあると書いてあります。小田原市役所足柄出張所前と大阪屋製粉工場裏手にありましたが平地化され、別に土器が発掘されたという噂も聞かれません。そのほか丸嶋石塔のある所も往昔は塚であると聞きました。遠い昔は古酒匂灣などといわれる様に私共の住んでいる所は海の入江が深く酒匂川に入っていたのではないかと思われず。畏い年月で土地の隆起をもたらし現今の様な地形が出来上りましたものでしょう。箱根を越え東国といわれます。大化改新奈良朝時代の祖庸調の運送、北九州に行く防人の故郷を跡にする歌など哀調を越えた悲話と思います。纏文弥生土器も別に出土した話も聞かず塚も古墳円墳といえるものか知りませんが、井細田を中心とした山の手には久野古墳群もあり、土器の出土も沢山であるので古代人の生活はやはり海の幸山の幸農耕と井細田近辺より

久野山にかけてが労働の基礎ではないかと思えます。水の便は久野川があります。祭政一致の政治と申します。井細田と響く人もあります。赤田・祭田、赤地名に『イチッコ』と呼ばれる所もあります。『神様』『仏様』『農田』とむすびつく地名です。大化の改新によって設けられた奈良時代国司の政府諸國に建立された国分寺共に神奈川県の中央北郊に位する地にあり古代の官道となった足柄道は御殿場の地竹の下から足柄峠を越えて関本に至る箱根外輪山の迂回コースで、更級日記に出てくる所。ま

には、私共の先祖は鎌倉の將軍源頼朝の侍所の別当職にあつた和義盛で鎌倉を落ちのびて、相州小田原在井細田村に住居し代々世を継ぎましたが、明治初年田を尾崎に乗換えて今日に至りました。と書かれており、丸に三引の紋所が遺品としてありますが、和田義盛と結びつかは知りませんが、和義盛は明治年間和田平兵衛氏の代で井細田とは縁が切れておりますが、尾崎氏が先年先祖の法要を致されました。鎌倉期の遺品としては、正運寺様、石川利三氏屋野幸一氏宅に日蓮宗ゆかりの一篇首題が残されております。太田道灌の訓の小田原の歌より想像しても名の如く『小田原』であつたと思われま

す。室町時代に入りま

原に居館を置き三浦攻め津島の戦、川越の夜襲、永祿四年謙信の小田原攻め逆襲と戦争もあり関八州の首都として、三代で基礎をかためた当時の小田原は人口三十万余といわれます。現今の小田原より大きいわけであり、井細田も何か恩恵をうけたのでしょう。氏政氏の直の時代に豊太閤の天下統一事業に反旗を立てた北条攻めは、規模の大きき兵力二〇万といわれ、家康は箱根、宮城野、諏訪原、多古井細田と経て今井庄に本陣を置き、兵三万という事で当時の井細田村の混乱は想像を越えたものと思われま

す。勿論北条方とて、手をこまねいていたわけではなく総力戦、十五才から七十才の老若男子はすでに武器鉄砲を持たされて戦つたといふことです。久野川の井細田を迂回する所『イチッコの竹藪』には伏兵を置いた。丸嶋洞の所は北条方の侍大将の陣屋であつた。陣屋道では激戦があつたとおじいさまから聞かされた。西の鈴木家ではその時兵火にかけられ家は焼かれたと伝えられております

徳川三百年の間は、人口の移動もなかつたのでしよう。本家名主中戸川家で勤請した八幡神社と妙円地蔵の創建があり、時に地蔵堂内に安置された足下地蔵の胎内の木像は鎌倉時代の運葉氏の小田原城の鬼門よけの寄進といわれております。名尾主としては今に長尾山に伝つた。本家中戸川家に現存し昔の風様を伝えております。あと一軒の本家名主としての星野次郎左エ門家は明治で消失してあります。鈴木家鈴の湯では蔵建の時、鈴木家十三代目の法被を職人衆に与えたといっており一族に袴など所持してあります。分家星野家の一篇首題の年月に元祿の号が見えます。亦世人を驚かした宝永四年の富士山の爆發は砂礫で田畑がうまり天日為に暗く、天変地異は恐怖の事、井細田でも影響はあつたことでしょう。今に残る石碑石塔石仏の年号に元祿寛保、宝曆、明和、寛政、享和、文化、文政、元治とあり石仏は崇高に石碑石塔共に時代の風格を伝えております。大久保忠真公時代日本の仇討史上に名高い浅田兄弟の実家は井細田の榊屋高田家でありませう。石川家の袖がらみ、油屋、山金さんの稲荷様の旗のぼりの年号は安政元年であり糸屋の家の板戸にも慶応の年号が見え半農半蚕で生活して、星野家は弘化元年には江戸にて菓子業の年期のあけた息子が親方の屋号青野屋の屋号で菓子渡世に店を出す。商品経済への転換期がきたのでしよう。石川金次家、府川義信家などの遺品を残し、本榊屋鍛冶古川家でも享保年間、江戸の名奉行大岡越前家への奉書など字書もあり、家伝としての民間薬、子供の夜泣き、止薬の秘薬もありませう。嘉永六年の小田原の大地震では井細田も被害をうけたことでしょう。小田原藩の画家岡本秋村の絵は經字屋石塚家にあり、二宮尊徳先生ゆかりの鶴沢作右エ門氏の名筆は、安政元年筆が星野家の床の間にかけてられております。クラ屋の『日本そば』も昔の風味手打ちの味がうまいです。和田家にあつた縁起物なども面白く名文で仏像の功績が書かれています。米貫とい

小田原史談会々員名簿

本年度分(昭和三十八年三月末日まで)

われた米谷家の徳川幕府印禁制のキリスト教を、隠れキリシタンで信仰した鬼子母神像台下の十字も、信心の強さを示すものです。橋詰家の桶職の鑑札報徳教の導師、府川万右エ門様では幕末時代の遺品も数多くあり、東海道の酒匂川の渡、飯景の渡、助郷と河川様、稲利様と徳川時代商家の出水は郷土の苦痛と思いの出た。相模風土記井細田村に江戸より二十里戸数九〇に井細田の南北に甲州街道二間半とあり、大体の状況もわかるし、建築も葎屋根の農村地帯であり、商家の建築なども六帖八帖見世仕事本史年表 (終)

- 城南支部: 東海俊美, 清水喜代春, 額田喜代春, 難波不空, 片野不空, 五野不空, 佐々木金一, 岩田忠介, 広田伊介, 杉山米吉, 関川重治, 湯川三治, 朝倉三治, 竹内信三, 堀内信三, 中津川完次, 片岡一郎
板橋支部: 加藤誠夫, 鈴木寛次郎, 宮村隆一, 西田光一, 福田光一, 福田光一, 小川光一, 加藤正明, 田中誠一, 吉岡誠一, 杉山誠一, 山岡誠一
城北支部: 中野教広, 安部敬造, 石川敬造, 市川敬造, 山室定雄, 伊東定雄, 早野蔵
杉山誠一, 山岡誠一, 吉岡誠一, 田中誠一, 加藤正明, 小川光一, 福田光一, 福田光一, 西田光一, 宮村隆一, 鈴木寛次郎, 加藤誠夫, 橋本庄平, 市川将貴, 市川慶之助, 宮内義之助, 美濃島房吉, 山室幾男, 安藤博康, 鶴塚示造, 鈴木貞嗣, 中村英治, 三宅信次郎, 長谷川周平, 瀬戸定吉, 北村正一郎, 津田久二, 若杉重男, 鈴木金次, 星野喜久雄, 諏訪部兼吉

曾石山小小片劍小小米片米井桜  
 我井口沢沢山持林山山山上井  
 源文文二寛太久万好文要英井  
 太郎兵作郎一郎治吉文治助一支部

村落  
 合信一  
 七之助  
 ◎日時 九月二日(日)  
 場所 箱根芦ノ湯松坂屋旅館

飯泉支部  
 小泉吉之助  
 浅見 豊 風  
 小野田 浅 吉  
 山崎カヅ 枝  
 門松進 平  
 門松利平  
 夏目賀久郎  
 高田正作  
 飯島治助  
 門松清治  
 星野アイ  
 沖津徳蔵

高田支部  
 内田武雄  
 富田とみ子  
 羽田潮政  
 浦井章太郎  
 飯田和昇  
 中里材木店  
 内田盛雄  
 鈴木寿代

下府中支部  
 菱田長平  
 小林良介  
 松本康子  
 松本君代  
 松坂正夫  
 ◎日時 五月二十六日(土) 午後一時~三時  
 ◎日時 八月八日(水) 午後一時より  
 議題 1、機関紙発行に関する件  
 2、その他  
 3、年間行事計画に関する件  
 4、その他

国府津支部  
 ◎日時 九月二日(日)  
 場所 箱根芦ノ湯松坂屋旅館

# 理事会の会場は

皆川 孝 演  
 神保 榮  
 神田 太郎 吉  
 神保 圭 介  
 神保 西 蔵  
 神保 達 志  
 下 田 良 雄  
 岸 達 志  
 一寸木 志 雄  
 山崎 益 太郎  
 磯崎 憲 次  
 立木 望 隆  
 下 田 芳 太郎  
 山 田 一 郎  
 久野 支部  
 石 塚 千 代 松  
 小 島 平 次 郎  
 石 塚 新 太 郎  
 石 持 仁 三 郎  
 荒 石 貞 治  
 富 沢 忠 次  
 富 沢 忠 次  
 長谷川 銀造  
 徳 坂 正 人  
 杉 崎 寅 之 助  
 ◎日時 九月八日(土) 午後一時より  
 ◎日時 九月九日(火) 午後一時より  
 ◎日時 十月九日(火) 午後一時より  
 ◎日時 十一月(土) 午後二時より  
 ◎日時 十二月(土) 午後二時より  
 ◎日時 一月十二日(土) 午後一時より  
 ◎日時 二月一日(金) 午後二時より  
 ◎日時 二月十五日(金) 午後一時より  
 ◎日時 三月二十日(水)  
 ◎日時 九月八日(土) 午後一時より  
 ◎日時 九月九日(火) 午後一時より  
 ◎日時 十月九日(火) 午後一時より  
 ◎日時 十一月(土) 午後二時より  
 ◎日時 十二月(土) 午後二時より  
 ◎日時 一月十二日(土) 午後一時より  
 ◎日時 二月一日(金) 午後二時より  
 ◎日時 二月十五日(金) 午後一時より  
 ◎日時 三月二十日(水)

◎日時 四月十二日(木) 午後一時~三時  
 於郷主文化館(以下毎回所定)

- 議題 1、事業報告の件  
 2、決算並に予算に関する件  
 3、年間行事計画に関する件  
 4、その他

## 38年度の

四月は県・市等の選挙のため諸会合を見合せます  
 五月は本会の総会を予定しております

## 小田原信用金庫

|  |  |   |  |
|--|--|---|--|
| <p>東海化成株式会社<br/>成型加工<br/>プラスチック<br/>取締役社長 海本友信<br/>電話 小田原五九二七番</p> | <p>資生堂ホールセール(特契店)<br/>ベルマン, パピリオドール, マ<br/>ナー, キャロン婦人靴下代理店<br/>山一商店<br/>小田原市井細田428<br/>電話 3553</p> | <p>建築金物<br/>家庭金物<br/>星崎仲吉商店<br/>小田原市多古412番地<br/>電話 2718</p> | <p>畳表・日用品<br/>問屋<br/>茶利商店<br/>小田原市多古25<br/>電話2341・2374</p> |
|--|--|---|--|

|   |  |   |   |
|---|--|---|---|
| <p>御料理仕出し<br/>御弁当<br/>東華軒<br/>代表取締役 飯沼相三郎<br/>小田原駅前<br/>TEL (0465) 5061~2</p> | <p>純良医薬品<br/>株式会社<br/>オタワラ薬局<br/>錦通り電三、〇四八</p> | <p>化粧品<br/>おしゃれ彩華<br/>松屋<br/>小田原錦通り<br/>電話三三三三六</p> | <p>松 銘菓 風<br/>千代 菊<br/>銘菓<br/>甘露梅<br/>集栄堂本店<br/>電話 2376<br/>銘菓(県指定の店)</p> |
|---|--|---|---|

|  |   |  |                        |
|--|---|--|------------------------|
| <p>平野商会<br/>平野久雄<br/>小田原市十字三<br/>電話(〇四六五)二四四九番</p> | <p>写真<br/>イガラシ<br/>小田原市幸3<br/>TEL 2534番</p> | <p>趣味の陶器<br/>江島屋<br/>小田原箱根口<br/>電話6602</p> | <p>齋澤<br/>TEL 3131</p> |
|--|---|--|------------------------|

|  |   |   |                                      |
|--|---|---|--------------------------------------|
| <p>印刷物は<br/>弘英印刷へ<br/>小田原市井細田八一<br/>電話四、一〇八番</p> | <p>楽しい生活<br/>明るい読書<br/>八小堂<br/>小田原駅前 TEL 5388~9</p> | <p>小田原報徳<br/>自動車株式会社<br/>太陽自動車<br/>株式会社<br/>代表者 曾我律之助</p> | <p>伊豆箱根鉄道株式会社<br/>大雄山線<br/>運営事務所</p> |
|--|---|---|--------------------------------------|

|   |                                     |                                   |  |
|---|-------------------------------------|-----------------------------------|--|
| <p>あなたの洋品店<br/>はふや<br/>小田原幸町<br/>TEL 2307</p> | <p>株式会社<br/>小田原百貨店<br/>社長 神戸英次郎</p> | <p>きそば庵<br/>小田原駅前<br/>電話二八六二番</p> | <p>松坂屋製菓本舗<br/>小田原市十字二<br/>電話五二七六番</p> |
|---|-------------------------------------|-----------------------------------|--|

|   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| <p>高級陶器の店<br/>小田原市緑1~103<br/>小田原銀座通り<br/>株式会社 江島屋陶舗<br/>TEL (0465) 5427</p> | <p>甘露梅<br/>月の衣<br/>小田原駅前<br/>正栄堂菓子舗<br/>電話 5311<br/>5312</p> | <p>寝具の店<br/>花田屋<br/>小田原銀座2<br/>電話 3788番</p> | <p>カメラ・写真用品<br/>なんでも揃う<br/>カメラの光輝堂<br/>小田原駅前 TEL 5965<br/>4859</p> |
|---|--|---|--|